

魔笛

魅惑の名演!

不世出の奇才ジャン＝ピエール・ボネルによる演出、端役に到るまで綺羅星のごとく配されたスター歌手たち、ジェームズ・レヴァインの指揮、ウィーン・フィルハーモニーの演奏、そしてザルツブルク音楽祭という最高のステージ——これ以上は望めないほど絢爛たるキャストとスタッフに恵まれた伝説的な舞台は、全編にわたり観どころ、聴きどころが満載! オーストリア・バロックの建築遺産という舞台ならではの演出が、幻想的な世界へと誘います。



(1982年8月21日フェルゼンライトシュレ(ザルツブルク)におけるライブ収録) 全プログラム 約3時間8分

主要なキャスト



ザラストロ

マルッティ・タルヴェラ (Martti Talvela)

1936年フィンランドのヒットラ生まれ。61年にストックホルムでデビューを果たし、同年ベルリン・ドイツ・オペラと契約。多くのレパートリーを誇ったが、89年に急逝。



タミーノ

ペーター・シュライアー (Peter Schreier)

1935年ドイツのマイセン生まれ。幼少時はドレスデンの十字教会唱題に在籍。50年に「フィデリオ」の第一の四人役でデビュー以来、最高峰のモーツァルト歌手として活躍した。



パミーナ

イレアナ・コトルバス (Ileana Cotrubas)

1939年ルーマニアのガラティ生まれ。音楽一家に育ち、64年に「ペレアスとメリザンド」のイニョルドでデビュー以来、ヨーロッパ各地で活躍。リリック・ソプラノの第一人者。



夜の女王

エディタ・グルベロヴァ (Edita Gruberova)

1948年スロバキアのブラチスラヴァ生まれ。地元でデビューした後、70年にウィーン国立歌劇場で大成を収める。コロラトゥーラの女王として世界的な名声を得ている。



パパゲーノ

クリスティアン・ベッシュ (Christian Boesch)

1941年ウィーン生まれ。ベルンの歌劇場やウィーン国立歌劇場で活躍。オーストリアの情緒が醸成する、パパゲーノのような役柄を得意とするだけに、祖国では高い人気を誇る。



弁者

ワルター・ベリー (Walter Berry)

1929年ウィーン生まれ。50年にウィーン国立歌劇場でデビュー以来、ウィーンを中心に活躍。晩年にはウィンナー・リートの分野でも活躍したが、2000年に死去。



指揮

ジェームズ・レヴァイン (James Levine)

1943年アメリカのシンシナティで音楽一家に生を受ける。幼少時よりピアノを始め、10歳でピアニストとしてデビュー。その後ジュリアード音楽院で指揮を学び、70年に指揮者としてデビュー。以来、欧米各地で活躍する。アメリカでは小澤征爾の後任としてメトロポリタン交響楽団の音楽監督などに就任している。とりわけメトロポリタン歌劇場とは縁が深く、73年に音楽指揮者、86年からは同劇場初の芸術監督に就任、現在に至る。本DVDではチェレスタも演奏。

台本: エマヌエル・シカネーダー
Libretto: Francesco Maria Piave

演出・装置・衣装: ジャン＝ピエール・ボネル
Stage Direction, Set and Costume Design by Jean-Pierre Ponelle

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
Wiener Philharmoniker

ウィーン国立歌劇場合唱団
Konzertvereinigung Wiener Staatsoper

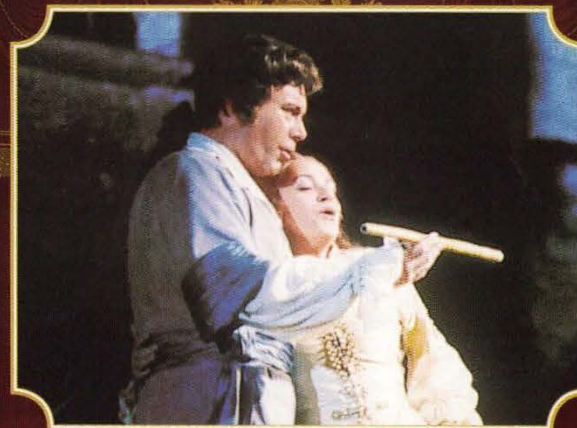
合唱指導: ワルター・ハーゲン＝グロル
Chorus Master: Walter Hagen-Groll

テレビ映像演出: ブライアン・ラーズ
Directed for TV and Video by Brian Large

技術指導: ハインリッヒ・アイグナー
Technical Director: Heinrich Eigner



Opera collection



3

魔笛

Die Zauberflöte
WOLFGANG AMADEUS MOZART

試練を乗り越えて結ばれる王子と王女

王子の冒険譚でありながら、寓意に満ちた顔と、聴きどころ満載のファンタジー。次々と展開するストーリーと魅惑の楽曲が、世界中の老若男女に愛され続けています。

タミーノ、大蛇に襲われる

さる国の王子タミーノは大蛇に襲われ気絶しますが、夜の女王に仕える3人の侍女が大蛇を退治、女王のもとへ若者が現れたことを報告に戻ります。



Chapter 3

パパゲーノが登場!

鳥の姿をしたパパゲーノが現れ、タミーノは彼が大蛇を退治したと思いこみます。



Chapter 7

タミーノ、パミーナに一目惚れ

侍女から肖像画を渡されたタミーノはまだ見ぬパミーナに恋をします。

High Light



Chapter 9

夜の女王、娘の救出を懇願

夜の女王はタミーノに、暴君ザラストロに掠られた娘パミーナを助け出したら、パミーナを与えると告げます。

王子とお供は、いざ旅立ちへ

タミーノは魔法の笛を、パパゲーノは銀の鈴を与えられ、ザラストロの城へ向かいます。



Chapter 11



Disk 1

第1幕

Chapter 1 オープニング

Chapter 2 序曲

Chapter 3 助けて! 助けて! 《第1番》
(タミーノ、3人の侍女)

Chapter 4 ここはどこ? (タミーノ)

Chapter 5 俺は鳥キャンチャー
《第2番 私は鳥刺し》 (パパゲーノ)

Chapter 6 「おおい!」 「何だ?」
(タミーノ、パパゲーノ、3人の侍女)

Chapter 7 何て美しい姿 《第3番》
(タミーノ)

Chapter 8 勇気を出して しっかりして
(3人の侍女、タミーノ)

Chapter 9 情がなくて 愛しい息子よ!
《第4番》 (夜の女王)

Chapter 10 今の現実? それとも夢? (タミーノ)

Chapter 11 フム! フム! フム! 《第5番》
(パパゲーノ、タミーノ、3人の侍女)

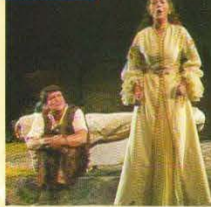
Chapter 13



パパゲーノ、パミーナを発見!

奴隷頭モノスタスはザラストロの神殿から逃げようとしたパミーナを捕まえ、自分のものにしようしますが、鳥の姿をしたパパゲーノに驚き逃げ去ります。

Chapter 15



パミーナ、パパゲーノをなぐさめる

タミーノに憧れを抱くパミーナに、自分には恋人がいなくて嘆くパパゲーノ。パミーナは、愛を感じる人は必ず報われるとなぐさめます。

Chapter 17



弁者、タミーノを諭す

ザラストロの神殿にたどり着いたタミーノの前に神官の1人である弁者が現れ、「女に騙されている」と告げます。けれど「沈黙が私の務め」と、それ以上は伝えずに去ります。

Chapter 18



魔法の笛で、不思議なことが...

弁者からパミーナが生きていることを聞いたタミーノ。喜んで魔法の笛を吹くと、獣たちが魔法の笛に聞き入ります。

Chapter 19



銀の鈴も大活躍!

逃げようとするパパゲーノとパミーナの前にモノスタスたちが立ち塞がりますが、パパゲーノが鈴を鳴らすと浮かれて立ち去ります。

Chapter 22



ザラストロが帰館

ザラストロが帰館します。モノスタスに連れられてタミーノが登場。パミーナと出会います。タミーノを捕まえた手柄を立てるモノスタスに、ザラストロは褒美の代わりに足の裏を77回打つ刑を申し渡し、タミーノとパパゲーノを試練の神殿へ連れて行くく命じます。

王子様が助けに来てくれる—— 喜びに胸を弾ませる無垢な王女

Chapter 12 何が可笑しい? (奴隷たち)

Chapter 13 姉ちゃん 来い 《第6番》
(モノスタス、パミーナ、パパゲーノ)

Chapter 14 お母さん! お母さん! お母さん!
(パミーナ、パパゲーノ)

Chapter 15 愛を感じられる男性なら 《第7番》
(パミーナ、パパゲーノ)

Chapter 16 この道を行けばその先が目的地
《第8番》
(3人の男の子、タミーノ)

Chapter 17 今の賢い教えを...
(タミーノ、ザラストロ、合唱)

Chapter 18 力に溢れた魔法の調べ (タミーノ)

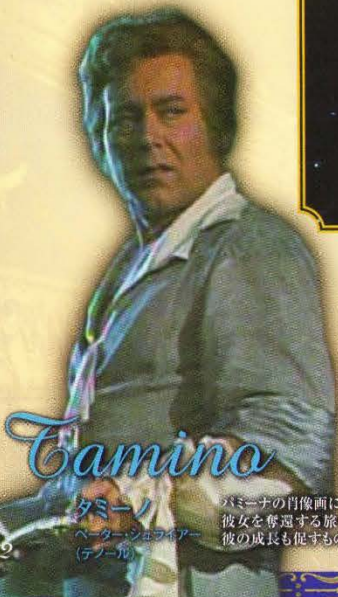
Chapter 19 急いで 勇んで (パパゲーノ、パミーナ、モノスタス、合唱)

Chapter 20 ザラストロ万歳!
(合唱、パパゲーノ、パミーナ)

Chapter 21 ザラストロ様 私は過ちを犯しました
(パミーナ、ザラストロ)

Chapter 22 来い 生意気な小僧! (モノスタス、パミーナ、タミーノ、合唱、ザラストロ)

まだ見ぬ王女を求めて 未知の世界へ 旅立つ王子



タミーノ
ペーター・コッファー
(テノール)

パミーナの肖像画に一目惚れして、彼女を奪還する旅へ。その旅は、彼の成長も促すものでした。



Pamina
ヘレン・ミューラー
(ソプラノ)

夜の女王の娘で、ザラストロの命に代わります。タミーノと出会い、相思相愛になります。

パミーナ
ヘレン・ミューラー
(ソプラノ)

お供のパパゲーノも、待望の恋人

僧侶たち、

タミーノの試練を語る

ザラストロはタミーノが教団の試練に耐えたなら
パミーナとの結婚を許すと僧侶たちに告げます。



Chapter 2

第2幕

Disk 2

Chapter 1
《第9番 神官たちの行進》

Chapter 2
イシスとオシリスに仕える諸君
(ザラストロ、第一と第二の神官)

Chapter 3
イシスの神よ オシリスの神よ
《第10番》(ザラストロ、合唱)

Chapter 4
何てこった(タミーノ、パバゲーノ、弁
者、第一と第二の神官)

Chapter 5
女の企みに気をつける《第11番》
(第一と第二の神官)

Chapter 6
なあ 明かりをくれ!
(パバゲーノ、タミーノ)

Chapter 7
なぜなぜなぜ《第12番》(3人の侍
女、パバゲーノ、タミーノ、合唱)

Chapter 8
よし! (第一と第二の神官、パバゲーノ)

Chapter 9
当たり前さ(モノスタス)

Chapter 10
惚れば楽しいさ《第13番》
(モノスタス)

Chapter 11
夜の女王だ
(モノスタス、夜の女王、パミーナ)

Chapter 12
胸にたぎる地獄の復讐《第14番》
(夜の女王)

Chapter 13
殺せ?
(パミーナ、モノスタス、ザラストロ)

Chapter 14
この聖なる神殿に《第15番》
(ザラストロ)

Chapter 15
ここに二人で残れ(第一と第二の神官、
パバゲーノ、タミーノ、パバゲーナ)

Chapter 16
再びようこそ《第16番》
(3人の男の子)

Chapter 17
タミーノどうだ?
(パバゲーノ、パミーナ)

Chapter 18
ああ たしかにもう終わりなのね
《第17番》(パミーナ)



Chapter 10

モノスタスがパミーナに...

モノスタスが、眠っているパミーナを見つけ驚かろうとします。

High Light



Chapter 12

夜の女王、ザラストロの殺害を
パミーナに命じる

そこへ夜の女王が現れます。そして亡き夫がザラストロ
に渡した太陽の世界(七重の太陽の環)を、ザラストロ
を短剣で刺して取り戻すようパミーナに命じます。

Chapter 15



謎の老婆が出現!

沈黙の行を続けるパバゲーノの
前に老婆が現れますが、名前を
名乗る前に姿を消してしまいます。

High Light



Chapter 18

沈黙のタミーノに、
嘆くパミーナ

沈黙の行のため喋れないタミーノ。パミーナ
は、彼の愛が消えてしまったと思い込んで、
涙と共に去ります。



Sarastro

ザラストロ
マルティン・タルヴェ
(バス)

夜の女王からは邪悪な魔法使
扱いされていますが、実は徳の
高い僧であることが判明します。

を獲得。2組のカップルが誕生!

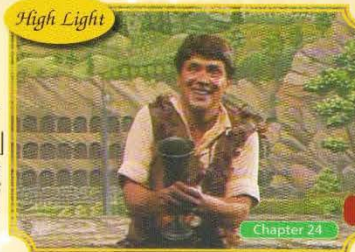
Chapter 22



恋人たち、別れを惜しむ

沈黙の試練に耐えたタミーノをねぎらいながらも、ザラストロは次なる
試練へ王子を向かわせます。タミーノとパミーナは別れを惜しみます。

High Light



Chapter 24

パバゲーノ、ワインを飲んで
「あとは恋人だけ」

置いてけぼりにされてタミーノを探すパバゲーノの前
に弁者が現れ、ワインを与えます。陽気になったパバ
ゲーノは、食事と娘さえあれば幸せになると歌います。

Chapter 26



パミーナ、自殺未遂!

絶望のあまり自殺しようとしたパミーナを童子たちが救い、
タミーノの元へ連れて行きます。

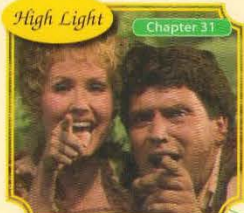
Chapter 29



タミーノとパミーナ、
火と水の試練に
打ち勝つ

試練に打ち勝った2人は祝福を受
けます。

High Light

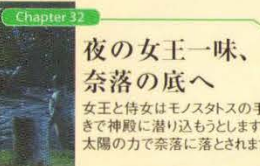


Chapter 31

パバゲーノ、恋人を得る!

童子が現れパバゲーナを連れて来ました。
パバゲーノは大喜び。

Chapter 32



夜の女王一味、
奈落の底へ

女王と侍女はモノスタスの手引
きで神殿に潜り込もうとしますが、
太陽の力で奈落に落とされます。

Behind the curtains
名作の舞台裏

指揮者が演奏!?

今号のDVDで指揮棒を振るのは、メトロポリ
タン歌劇場の首席指揮者・芸術監督として
知られるジェイムズ・レヴァイン。ピアニストと
してソロ・アルバムまで出ているレヴァインは、
この公演でチェレスタという鍵盤楽器を演奏
しています。演奏中の彼の姿も収録されて
いるので、ぜひチェックしてみてください。

Papageno

パバゲーノ
クリスティアン・ベッショ
(バリトン)

鳥を捕って夜の女王に持って行くこと
を計を立てている鳥刺し。ひょんなこと
からタミーノのお供になります。

Chapter 19
なあ タミーノ(パバゲーノ、タミーノ)

Chapter 20
イシスの神 オシリスの神 何という喜び!
《第18番》

Chapter 21
王子よ 勇らしく冷静だった
(ザラストロ、パミーナ)

Chapter 22
もう会えないの? 《第19番》
(パミーナ、ザラストロ、タミーノ)

Chapter 23
タミーノ! タミーノ! (パバゲーノ、弁者)

Chapter 24
パバゲーノはお姉ちゃんが欲しいな
《第20番 恋人か女房か》
(パバゲーノ)

Chapter 25
私だよ お兄さん
(パバゲーノ、パバゲーノ、弁者)

Chapter 26
朝の訪れを告げる太陽は《第21番》
(3人の男の子、パミーナ)

Chapter 27
苦悩を負ってこの道を行けば(鐘を着
た番兵たち、タミーノ、パミーナ)

Chapter 28
私のタミーノ! 幸せだわ
(パミーナ、タミーノ、鐘を着た番兵たち)

Chapter 29
燃えさかる炎の中(パミーナ、タミーノ、
合唱)

Chapter 30
パバゲーナ! パバゲーナ! パバゲーナ!
《自殺のアリア》
(パバゲーノ、3人の男の子)

Chapter 31
「パバゲーナ!」「パバゲーナ!」
(パバゲーノ、パバゲーナ)

Chapter 32
静かに 静かに!
(モノスタス、夜の女王、3人の侍女)

Chapter 33
太陽の輝きが夜の闇を追い払い
(ザラストロ、合唱)



Chapter 33

あらゆる種類の音楽で彩る、作曲家の集大成

モーツァルトの五大オペラの中でも、最大の規模を誇る作品で、音楽上も、彼の声楽曲の集大成といえるでしょう。分類上は、ドイツ語圏に特有の、地の科白を配したジグシュピール(歌芝居)と呼ばれる形式で、モーツァルトの作品例ではほかに、『バスティエンとバスティエンス』(K.50)、『後宮からの誘拐』(K.384)がこれに当たり、『魔笛』(K.620)の影響を受けたドイツ国民オペラの祖、ウェーバーの『魔弾の射手』も、ジグシュピールです。このため、歌い手には台詞回しの巧みさも要求され、俳優であることも条件の一つとなります。また、歌のある17役のどれもに聞かせどころがあるのも、特徴です。

文:青島広志

超人的な音域の 夜の女王とザラストロ

何といっても超人的な音域を持つ、夜の女王(高いソプラノ)とザラストロ(低いバス)のアリアが聞きどころです。とくに夜の女王は出番はそう多くないものの、2曲のアリアによって聴衆に強い印象を与えます。

第一のアリア怖がらないで 愛しい息子よ(Disc1/Chap.9)は構えの大きな構成で、出現を示唆する前奏とレチタティーヴォの後、テンポの緩やかな部分でわが子を失った悲しみを訴え、急速な部分ではやがて王子によって救われる喜びをコロラトゥーラ唱法によって表します。最高音はハイF(ファ)まで登りつめ、これは強靱な意志の力と筋力によってのみ得られる高さの音です。

彼女の第二のアリア胸にたぎる地獄の復讐(Disc2/Chap.12)は、わが娘パミーナを叱責する強い表情を持ち、さまざまな音型のコロラトゥーラを歌い

分ける技術が必要とされ、こちらはフルートと同じ高さの音域に長く留まり、4回ものハイF音に到達しなければなりません。

彼女の敵であり、演出によっては元の夫とも考えられるザラストロもやはり2曲のアリアを持ち、第1曲のイシスの神よ オシリスの神よ(Disc2/Chap.3)は男声合唱を従えて格調高く歌われます。第2曲のこの聖なる神殿に(Disc2/Chap.14)もまた荘厳な曲想ですが、パミーナに対する父性的な愛も感じられます。2曲目では、歌い方に

娘パミーナの警護をタミーノに託せる夜の女王。驚くべき高音の超絶技巧が、これでもかといふに披露されます。



よっては低いE(ミ)まで下げて終わる場合もあり、こちらも科白の直後に歌うことになるため、歌い手にとっては過度な興奮を抑える必要が生じます。

いずれも聴きどころの、タミーノ、 パミーナ、パパゲーノのアリア

この物語では誰が主人公なのか曖昧になりがちですが、王子タミーノがとらわれの王女パミーナを救い出すストーリーが軸になっていると一応は考えることができます。

この内、最初から登場しているタミーノには第1幕に2曲のアリアと認められる箇所があり、その始めは絵姿のアリアと呼ばれる、パミーナの肖像画を見つつ歌う英雄的な歌 何て美しい姿(Disc1/Chap.7)で、速くヘンデルの影響を認めることができます。とくにオーケストラが彼の心理状態を描いているところが斬新です。

もう1曲は第1幕フィナーレに含まれる笛のアリアと呼ばれる力に溢れた魔法の調べ(Disc1/Chap.18)で、フルートを吹きつつ歌うという聞き手にとって楽しい場面になっていますが、惜しいのは後半が台本のせいで完全な終止感が味わえないことでしょう。そしてこの後、タミーノは音楽上、あまり発言しなくなってしまうのです。

一方パミーナは、唯一のアリアああ たしかにもう終わりのね(Disc2/Chap.18)が第2幕にあり、これは死を暗示するト短調で書かれ、エネルギーを喪失した足どりのリズムを持つシチリアーノ舞曲の上に、きわめて長いプレスを必要とする旋律が歌われます。そしてこれ以降、彼女は娘役から脱皮し、真のプリマドンナになって行くのです。

タミーノの従者から出発し、しまいに主役たちを喰ってしまう感のある鳥の狩人パパゲーノは、このオペラきっての愛すべき役です。モーツァルトの喜劇には必ずこうしたバリトン(当時はバス)役がありますが、そうした一連の役の中でも、パパゲーノを演じたいと思っている歌い手は沢山います。

彼は民謡風の2つのアリアを持ち、どちらも繰り返しの有節歌曲の形で書かれています。彼は小道具の鳥寄せの笛(5つの音のみ)とお守りの鈴を持っており、第一のアリア俺は鳥キャッチャー(私は鳥刺し Disc1/Chap.5)では笛、第二のアリアパパゲーノはお姉ちゃんが欲しいな(恋人か女房が Disc2/Chap.24)では鈴(実際の音はオー



パミーナ唯一のアリアは、悲しみに満ちた“悲鳴”でもあります。

ケストラのグロッケンシュピール)を奏しながら歌います。彼にはもう一つ、長い独唱部分があり、一目惚れしたパパゲーノを探し疲れて自殺しようとするパパゲーナ! パパゲーナ! パパゲーナ! (自殺のアリア Disc2/Chap.30)は、観客に助けを求める参加型の歌として有名です。パパゲーノの初演者は台本作家のシカネーダー自身だったので、目立つように書いたのかも知れません。この歌はやがて現れたパパゲーナとの楽しい二重唱「パパゲーナ!」「パパゲーナ!」(パパ Disc2/Chap.31)に繋がり、このオペラ最大の聞きどころとなります。

バイ・プレーヤーの弁者と モノスタスにも魅力的な楽曲が

この作品では、善と悪の役が前半と後半で逆転します。すなわち善を代表すると思われた夜の女王が悪女に、悪魔かと思われたザラストロが徳の高い僧に変わるわけですが、その転換を担う人物が弁者と呼ばれる存在です。彼はザラストロの腹心で、第1幕の後半でタミーノに真実を告げますが、このタミーノとの対話の部分はすべてレチタティーヴォで、音楽的にも高度に書かれ、指揮者の試金石ともなり、残念ながら小さいお客さんには好まれない部分です。

弁者はその昔パパゲーノで鳴らしたような老練なバリトンが受け持ち、第2幕ではもう一人の僧侶(キャラクターのあるテノール)と共に女の企みに気をつける(Disc2/

Chap.5) という小さな二重唱を歌います。この物語の中で、とくにザラストロの教団では女性が軽視されていますが、これはモーツァルトと台本作者のシカネーダーが入会していた秘密結社フリーメーソンが、男性のみを団員としていたためで、他意はありません。

もう一人、重要な人物はつねに悪の側に回るムーア人モノスタスですが、モーツァルトはこの役にかかなり同情的で、第1幕フィナーレではタミーノを捕らえて得意がる彼に、『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』そっくりの堂々とした独唱部(Disc1/Chap.22)を与えたり、第2幕では囁き声で歌うアリア惚れれば楽しいさ(Disc2/Chap.10)を用意しています。彼の伴奏にはトルコ音楽に必須のオーボエとピッコロが加わります。

極めて美しい三重唱を披露する 3人の侍女と3人の童子たち

3人ずつの組で団結する侍女と童子は、それぞれ官能と守護の権化ですが、どちらも極めて美しい三重唱を聞かせます。侍女には冒頭の助けて! 助けて!(Disc1/Chap.3)で、大蛇から救ったタミーノを奪い合うアンサンブルがあるだけですが、成熟した女性の心理と立ち居振舞をみごとに描き切っています。



パミーナの自殺を止めた後の四重唱。3人の童子は人々を善の方向へと導きます。

この3人は個性の強いプリマを張る女性歌手によって演じられるとき、最も強烈な存在価値を発揮します。この後、彼女たちはタミーノ、パバゲーノと一緒に2曲の五重唱(Disc1/Chap.16 Disc2/Chap.7)を受け持ちます。

一方、本来は少年によって歌われる童子はザラストロ側の守護天使の役割を持ち、人々を善の方向に導きます。その登場は第1幕フィナーレの冒頭この道を行けばその先が目的地(Disc1/Chap.16)ですが、第2幕では試練を受けているタミーノたちに食料を運んで来たり、自殺しようとしているパミーナを救って四重唱を歌ったり、パバゲーノにパバゲーナを連れて来たりと、大忙しです。

残りの登場人物としては、2人の鎧を着た番兵と呼ばれる役があり、タミーノとパミーナの試練の場(Disc2/Chap.27)で宗教的な詞を斉唱します。強い声が必要で、ワーグナー歌いの男声歌手が起用されることがよくあります。

序曲に秘められた フリーメーソンの暗示

合唱は、男声部が充実した混声合唱で、2回あるフィナーレは彼らによって盛り上がり、幕を閉じます。また、陰コーラスとしても2回、その声を聞かせます。

オーケストラは、モーツァルトの全オペラのうち、『ドン・ジョヴァンニ』と並ぶ充実した序曲があり、その初めに聞かれる3回の和音は、主調の変ホ長調(bが3個)と関連して、フリーメーソンの重要な数である3を暗示しています。序曲はソナタ形式で、フガート(※1)で始まるのも、その迫りかけの手法が、第1曲目にタミーノが大蛇に追いかけている前兆と考えられます。楽器にはモーツァルトが好んだバセットホルン(低いクラリネット)も使われているので、ピットを覗いてみてください。

※1 フガート 曲の一部の、フーガのような部分。本誌に登場するオペラ用語につきましても、第2号付録の「オペラ基本用語集」をご参照ください。

Disk 2
Chapter 24



恋人か女房が

作曲：ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
作詞：エマヌエル・シカネーダー
訳詞：伊藤武雄

Ein Mädchen oder Weibchen

恋人か女房が

Andante

アイン マットヒェン オ デル ヴァー イフヒェンヴァンシュトハ パ ゲー ノー
Ein Mäd-chen o - der Weib - chen wünscht Pa - pa - ge - no -
こ い び と か にようばうー が この パ バ ゲー ノー

ズィッヒ オ ヴァ アインザンフ テスト イフヒェン ヴェール セーリッヒ カイト フウル
sieh! O so ein sanf - tes Täub - chen wär - Sc - lig - keit für -
に ひ と り で も あ れば さー ぞ や よー かー

ミッヒ ヴェル セー リッヒ カイト フウル
ich! wär - Sc - lig - keit für mich! wär - Sc - lig - keit für -
ろ し あ わ せ だー ろ し あー わー せー だー

Allegro

ミッヒ デン レウエックル ミットリンケンウントエッセン
ich! Dann schnecke mir Trin-ken und Es - sen, dann
ろ の めー よく え たく さん

ケンツィットフミットフウルスアンミッヒ
könn'ich mit Für-sten-mich mes - sen, des Le-bens als Wei-ser mich freun, und
く らー で も よ し とい う こと なら ば

グーイム エリ ジウム サイン
wie im E - ly - si-um sein. Dann könn' ich mit Für - sten mich
の よ は ごく ら と に ま け ず たぐ

メッセン デス レベンスアルスワイゼルミッヒ フロ
mes - sen, des Le-bens als Wei-ser mich freun, und wie im E - ly - si-um
さん い た だ い て お れ ば こ の よ は ごく ら

ザイン イム エリ ジウム
sein, im E - ly - si-um sein, im E - ly - si-um sein.
く よ は ごく ら く

アリアに挑戦!



愛する相手の出現を、ひたすらお気楽に願う
パバゲーノもまた、愛すべき人物です。

モーツァルトの童心が最も良く表れたオペラとして、小学校の教科書にも載るほどのメロディーが満載ですが、ここでは愛すべきパバゲーノの2曲目のアリアを取り上げましょう。誰にでも無理なく歌える音域であること、曲が二部分に分かれ、変化に富むことが特徴です。

歌い方としては、前半と後半のテンポの違いをはっきりつかむこと、リズムに乗って言葉をよく伝えることが秘訣です。歌の合いの手にグロッケンシュピール(鉄琴)が入りますが、それも自分で鳴らしているつもりで歌いましょう。民謡そのもの、といった旋律ですから、たまには音はずしても、そこはご愛敬です。モーツァルト4歳のときの小品にも同じメロディーが使われています。

文：青島広志



Die Zauberflöte

魔笛——ミステリアスなお伽話を彩る音楽の魔法

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)の最後のオペラ『魔笛』(1791年初演)は、不思議なオペラです。物語は途中からつじつまが合わなくなるし、内容それ自体もわからないことばかり。場面も飛び飛びで、筋を追うのに苦労します。けれど『魔笛』の人気は圧倒的です。特にドイツやオーストリアといったドイツ語圏の国々では、ドイツ語のオペラということもあり、文句なしに上演回数ナンバーワンの演目ようです。なぜ『魔笛』は、これほど人気があるのでしょうか。

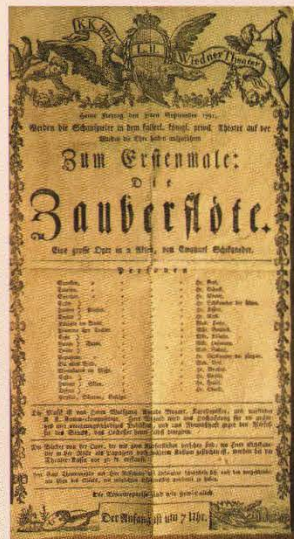


メルヘンか、教訓劇か—— フリーメイソンの教を反映!!

『魔笛』のストーリーは一見メルヘン調です。「魔法の笛」を手にした王子さまのタミーノが、さらわれたお姫さまのパミーナを助け出し、2人はめでたく結ばれました…で終わればいいのですが、パミーナの母親の「夜の女王」が急に悪役になってしまったり、タミーノが突然「試練」を受けることになったりと、不意打ちづくめでこんがらがってしまうのです。

一説によればタミーノの受ける「試練」は、モーツァルトが入会していた結社「フリーメイソン」の入会式を表しているそうです。フリーメイソンの起源には諸説ありますが、結社の目標は自由、平等、博愛を信条にした理想主義社会の建設でした。

フリーメイソンは当時、貴族や知識人の間で大流行していたようで、皇帝ヨーゼフ2世をはじめ、ハイドン、映画『アマデウス』に登場する宮廷楽長サリエリ、『魔笛』の台本をモーツァルトと共同制作した俳優のシカネーダーなど、そうそうたる顔ぶれが会員でした。実はハイドンを



初演された1791年の、『魔笛』のポスター。世代を問わず楽しめる音楽の魅力で、初演時から大好評を博しました。

入会させたのはモーツァルトで、モーツァルトが結社の活動に熱心だったことがうかがえます。

また『魔笛』には、フリーメイソンの教を反映したと思われる曲が何曲も見られます(たとえばパミーナと鳥刺しババゲーノの二重唱「愛を感じられる男性なら」は、「愛」についての教訓を示した歌とされています)。



超絶技巧から民衆劇の要素まで、 あらゆる音楽を盛り込む

とはいえ『魔笛』が、ウィーンで人気のあった民衆劇の「おとぎ話」オペラ、あるいは魔法オペラの系列に属していることも確かです。『魔笛』は、前述の俳優シカネーダーが主宰していたアウフ・デア・ヴィーデン劇場からの注文で作曲されましたが、宮廷の劇場がイタリア(語)オペラをもっぱら上演していたのに引き換え、この劇場はドイツ語による民衆劇を看板にしていた(そのため『魔笛』はドイツ語オペラで、一方宮廷用に使われた『フィガロの結婚』はイタリア語オペラなのです)。「魔笛」が初演された前年には、『魔笛』とそっくりの内容を持つオペラ『賢者の石』が人気を集めていたそうです。『魔笛』のはちゃめちゃんストーリーは、ウィーンの



『魔笛』は何度も映像化され、映画化はもちろん、アニメーションとして放映されたこともありました。写真はTV映画『魔笛』を撮影中の、スウェーデンの巨匠イングマル・ベルイマン監督(1974)。



ババゲーノに扮したシカネーダー。彼は初演でババゲーノ役を務めました。



『魔笛』の台本を手がけ、モーツァルトに作曲を依頼したエマヌエル・シカネーダー。初演の場所であるアウフ・デア・ヴィーデン劇場の支配人でもありました。

聴衆にはおそらくおなじみのものだったのでしょう。

けれど『魔笛』の人気は、ストーリーにあるわけではありません。理由ははずばり、モーツァルトの音楽そのものです。『魔笛』には、モーツァルトがオペラを通じて開拓した、ありとあらゆる種類の音楽が詰め込まれているのです。夜の女王が超絶技巧を披露する2曲のアリアは、宮廷で愛好されたイタリア語による伝統的な「オペラ・

セリア」のスタイルで、ババゲーノが歌う親しみやすい民謡風のアリアは、民衆劇にお決まりのものでした。いわばモーツァルトは『魔笛』で、自分のオペラの語法を集大成したのだといえましょう。

同時に『魔笛』には、観る楽しみもふんだんに盛り込まれてい



19世紀初頭に描かれたザラストロのイラスト。現在は重厚な役どころとされていますが、ここでは若くてハンサムに描かれています。



「魔法の笛」に象徴された 音楽の力

『魔笛』というタイトルは、作中に登場する「魔法の笛」由来していますが、この「魔法の笛」は、「音楽の力」の象徴だとされています。タミーノに笛を渡す時、夜の女王の3人の侍女たちは、笛の音の効力をこう説明します。「人の気持ちを変え、悲しむ人に喜びを、頑なな心に愛をもたらす。人の心に幸せ、満足を与えてくれる」。これこそ、音楽の持つ魂を揺り動かす力を暗示しているのだというのです。



眠っているパミーナに醒めかこうとする、奴隷のモノスタス。19世紀初頭に描かれたものです。

音楽の持つ、魂を揺り動かす力。「魔笛」にあふれる素晴らしい音楽は、そのことを実感させてくれることでしょう。

文：加藤浩子

626 曲を創造した 天才の短い生涯

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart
(1756 ~ 1791)



喋る速度で作曲する 驚嘆すべき筆の速さ

綺羅星のように居並ぶ作曲家たちの中でも、その天才性がひととき際立っているのは、神童とあだ名を付けられたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトでしょう。何しろ2歳でクラヴィア（鍵盤楽器）の音高を聞き分け、3歳で演奏を始め、4歳で何曲かの小品を作曲し、6歳でハプスブルグ家の女帝マリア・テレジアの前で公開演奏をしてから、ヨーロッパ各地で演奏旅行をして回ります。

その作品は吹奏楽以外のすべての分野にわたり、五線紙に書き付ける速さは喋る速度と同じで、頭の中に完成している音楽を筆写するかのようでした。そして35年という短い生涯の中で、上演時間3時間を超えるオペラを含む626曲（これは研究者ケッセルが最初に示した数で、実際にはもっと多い）もの作品を残しています。しかも演奏家としての活動や、作品の初演に向けての稽古、生活の糧を得るためのピアノ教師などをしながらです。その筆の速さは驚嘆するに足りるでしょう。

モーツァルトは生涯、小柄でした。その理由は幼少のころ、音楽中心の生活で運動不足だったとか、旅行は狭い馬車で移動していたためとか、成長期に家庭で食事をしなかったからだとかいわれていますが、その容姿もいつも少年らしく、そのために「神童」と呼ばれていたのです。この点、同じ30代で死んでしまっても、若い頃から大人びていたシューベルトとは正反対でした。しかし、大柄な人間を部下として重用したザルツブルクのコロレド大司教からは疎んじられましたし、成人してから、かつ

ての大歓迎を期待して再訪したパリの聴衆たちからは、すでにアイドル視されなくなっていたのです。

愛する女性の出現で 初めて父親にそむく

このパリへの就職活動の折、モーツァルトは初めてともいえる恋愛をしています。行きにマンハイムで知り合った浄書屋の次女アロイシア・ウェーバーがその相手で、彼女は初期ロマン派の作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバーの従姉妹に当たり、技巧的なソプラノ歌手でした。モーツァルトはレチタティーヴォ付きアリア（K.294）を贈っていますが、彼女はモーツァルトの帰路を待たずに、もっと収入が確実な男性と結婚して結局はウィーンへ去ってしまいます。パリで母親を亡くしたばかりのモーツァルトに、ウェーバー夫人が目をつけ、三女のコンスタンツェを接近させ、世間知らずのモーツァルトに「3年以内に結婚しない場合は、一生、300グルデンの年金を払い続けること」という条件の契約書にサインさせてしまったのです。

しかし、すでにコンスタンツェを愛し始め、しかも同じ時期に作曲していたオペラ『後宮からの誘拐』の女主人公の名がコン

スタンツェだったという偶然も手伝って、モーツァルトは彼女と結婚してしまいます。父親のレオポルトはこれを阻止しようとはしますが、ほぼ25年以上も父の管理下にあったモーツァルトは、このとき初めて父にそむき、自発的な生活を送ろうとしますが、それはみごとに失敗し、あとわずか10年の生涯を残すのみとなるのです。

現実が悲惨であるほど 純度を増す作品の質

しかし、これ以降の作品数の多さと内容の充実度は、生活苦とは全く無縁に思われます。この点がモーツァルトの属する古典派の作曲家の職人性ですが、単にそこに留まらず、現実生活が悲惨であればあるほど、作品の純度は増しているようです。

とくに『後宮からの誘拐』から始まる五大オペラ、『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『コジ・ファン・トゥッテ』『魔笛』は、結婚生活と固く結びついていることは確かです。そして、あくまで神童としての天真爛漫さが基本にあったとしても、そこに、後から知り得た人間の暗部をとらえた悪魔的な表現も、ときに加えることによって、大人から子供にまで愛される魅力的な舞台作品を作り上げています。

その音楽の端正さも、彼以降のオペラ作曲家には失われてしまった特徴で、こんなところから、音楽学生や初心者がかみ初めに取り組み、必ずモーツァルトの作品なのです。彼の作品は、仮に声楽曲であっても、そのまま器楽に移し換えることもできますから、楽器を演奏している人は、ぜひ弾いてみてください。手軽にモーツァルトのオペラが楽しめますよ。

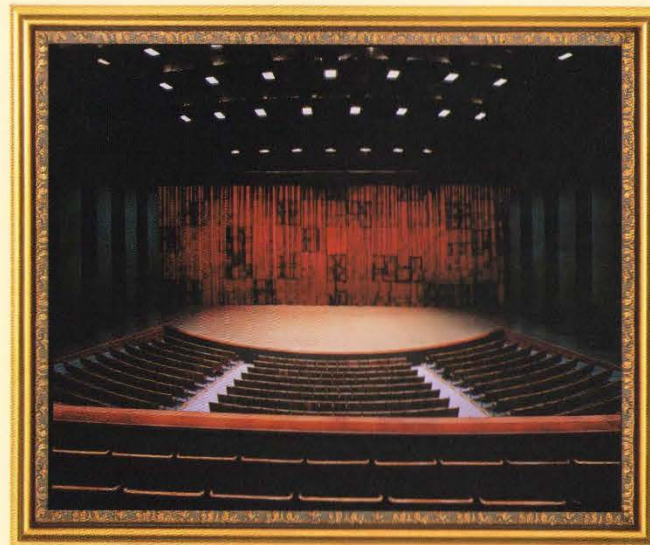
文：青島広志



上はモーツァルト自筆による『交響曲第38番 二長調（K.504）』の楽譜（1787年）。左はザルツブルクにあるモーツァルトの生家。今でも世界中からファンが訪れているのは、いうまでもありません。

Salzburger Festspiele

ザルツブルク音楽祭



音楽祭はザルツブルクの街の各所にある会場で開催されます。ここはメインとなる祝祭大劇場のステージ。オペラとコンサートに使われます。

© 2009 SALZBURGER FESTSPIELE

モーツァルトの生地ザルツブルクで開催される、夏のオペラ・音楽・演劇フェスティバルの老舗にして最高峰。1920年、作曲家のリヒャルト・シュトラウスや劇作家のホフマンスタールらの提唱により、演劇の『イエエターマン』で開幕しました。

ザルツブルク音楽祭は、なんといってもオペラ、コンサートの質の高さで知られています。第一の理由は、世界一のオーケストラであるウィーン・フィルが、本拠地のウィーン国立歌劇場が夏休みに入るため、ザルツブルクに移動してくること。この伝統は創設当初から、彼らとともにそうそうたる名指揮者もフェスティバルの常連となりました。7～8月にかけて5～6本上演されるオペラは、音楽ファンやジャーナリストの注目の的であつづけています。

オペラの人気作品はザルツブルクゆかりのモーツァルトですが、近年の特徴は過激な演出。演劇フェスティバルを兼ねていることもあり、演劇人の演出への参入が顕著で、ドイツ語圏で人気の、時代や場所など設定を変える「読み替え」演出の最先端を行くフェスティバルでもあります。

2000席を超える祝祭大劇場（1960年開場）、乗馬学校を改装したフェルゼンライトシュレーをはじめ、いくつかの会場がありますが、「社交界」の雰囲気根強く残るのもザルツブルクの特徴です。オペラ公演のドレスコードはフォーマルで、今では珍しくなったタキシードにロングドレスが、ここではまだ定番になっています。

文：加藤浩子



Data File

- 《開場》
1920年8月22日
- 《席数》
2177席（祝祭大劇場）
- 《主な初演作》
リヒャルト・シュトラウス『ダナエの恋』、アイネム『ダントンの死』、ヘンツェ『パッカスの巫女』、ペリオ『王は耳をそばだてる』
- 《活躍した主な指揮者》
リヒャルト・シュトラウス、クレメンス・クラウス、ヴィルヘルム・フルヴェンゲラー、カール・ベーム、ヘルベルト・フォン・カラヤン
- 《活躍した主な歌手》
エリザベート・シュヴァルツコフ、フィッシャー・ディスカウ、ルチア・ボップ、ペーター・シュライヤー、アンナ・トモワ・シントウ、キャスリーン・バルト、ブラント・ドミンゴ、ホセ・カレーラス



演劇やクラシックのコンサートなど、オペラ以外のプログラムも充実しています。

Sean Gallup / ゲッティイメージズ

アクセスマップ



http://www.salzburgerfestspiele.at/
所在地：Hofstallgasse 1 A-5020 Salzburg Austria